

同性だから嫌というほどわかる 女性プレーヤーの心理

シドニー、アテネとオリンピック2大会連続でソフトボール日本代表をメダルに導いた宇津木妙子氏。速射砲ノックをはじめ厳しい指導が取り上げられるケースが多いが、その裏には、実に繊細なまなざしがあった。



写真/金子洋

※日本リーグ初の 女性監督就任

1985年、ソフトボールで女性として初めて日本リーグ(日立高崎/当時)の監督になりました。その前年末、同社の工場長から打診されたのです。相当迷いました。果たして結果が出せるのか。企業スポーツは勝たなければ意味がない。結果が出ているときは人も寄ってくるが、悪くなれば離れていく。景気によっては廃部の可能性もある。現役時代、いろいろなことを経験していましたが、さまざまな思いが巡ったのです。

高校の恩師に相談すると、「女の監督はいない。やめておけ」と結婚を勧められる。父にも企業スポーツで経験した洗いざら

いを打ち明け、自分の考えをぶつけました。

「どんな指導者が理想か、いろいろ経験したからわかる。選手に公平に接し、それぞれを生かす場をつくるのが大切だと思っている」

すると父が、「指導理念は何だ」と聞いてきました。

「勝利すること、そして会社から、地域から愛されること」

「そうか。3年間頑張ってみよう」

再び工場長に会ったときは、「やらせてください」と私から頭を下げていました。

ですが、そのあと後援会組織があることを知り、会ってみると6人全員が男性で、タバコの煙を

パーツと吹かしているんですね。瞬間、「あつ、私は認められていない」、そう思いました。当時、女性

のリーダーなどいませんでしたから、「本当に任せて大丈夫か?」、そんな思いもあったのでしよう。

絶対、見返してやろう、生来の負けん気から強く思ったものです。

選手は12人いましたが、ジュニア時代に活躍したピッチャーをはじめそれぞれ高い能力は備えていました。ただ、会社に対する

甘えも見える。どこかスター扱いの面があり、ソフトボールだけ

やつていればいい、そんな雰囲気がありました。

時間厳守、あいさつ、整理整頓、気配り、目配り、思いやり、時には犠牲になる精神など、チーム

改革からスタートしました。常に余裕を持って周りを見られる

かどうか。きめの細かさが必ず試合で出る。技術はあっても心、

結局は人間力がモノをいいます。

「最後は100%以上の力を出さなければ勝てない。私は下手だったけど、練習は懸命にやっ

た。ただ練習だけでは足りない。自分のよさをどうすれば表現で

きるのか考える。個性をアピールし、それがチームになったとき最

強になる」

そう選手に伝えました。

※とことん、とことん 選手を見つめた

男性、女性というよりも指導

者は適材適所を考え自らの役割を全うするのが重要だと思

いますが、それでも同性だから見えてくることがあります。同性

だから嫌になるほどわかること

もあるのです。
例えば、本当はまだやれるのに疲れたふり、痛いふりをする。ノッ

解説/宇津木妙子

うつぎ たえこ 1953年生まれ、埼玉県出身。中学1年からソフトボールを始め、星野女子(現星野)高等学校を経て、ユニチカ垂井に入社。'74年、最年少で世界選手権に出場し、準優勝。'85年に現役引退し、日立高崎(現ビックカメラ高崎)の監督に就任(日本リーグ初の女性監督)。'97年、日本代表監督に就任。オリンピックではシドニー大会で銀、アテネ大会では銅メダルを獲得。ビックカメラ女子ソフトボール高崎シニアアドバイザー、東京国際大学女子ソフトボール部総監督、NPO法人ソフトボールドリーム理事長、日本体育協会理事、日本体育協会公認ソフトボール指導員。

クでボールに飛び込んだ一瞬、倒れ込みながら息抜きしようとする。私も現役時代そうでしたから、手に取るようにわかるんですね。練習後はベチャクチャしゃべりながらご飯を食べている。余力がある証拠です。監督に就任した当時、チームは3部に所属していましたが、練習後はしゃべれない、ご飯を食べられないほどの猛練習もしました。おかげで2部、1部と順調に上がっていききました。指導者は限界のもう一歩先を導けるかどうかが大切になるので

「自然体で自分をアピールしてほしい」と語る宇津木妙子氏
(写真: YUTAKA・アプロスポーツ)



す。ただし、常にハードトレーニングを課していたわけではなく、年間スケジュールを考えながら、追い込むときはとことん追い込む。

一方で忘れてはいけないのが、選手をとことん見ることでした。選手一人ひとりの分析ノートを作りました。家族構成、血液型、高校時代にどんな指導を受

けていたのか、長所や短所、チャンスをやピンチでの強さ、技術は、体力は、ソフトボールに対する取り組み方はどうなのか。

私は人が大好きなんです。常に選手と一緒にいたい。街角でキャッチボールをしている子どもを見かけても声をかけたくなる。成長する姿を見るのがうれ

しい。あらゆる面で絶えず選手を見つめました。

もう一つ、女子はたとえ高校を卒業したばかりの選手でも先輩後輩関係なく同等に見るんですね。同じ女性ですが、女子はやっぱり難しい(笑)。

私はエリートではありません。選手のとときは2番手、付録でし

た。理論に基づいた指導哲学があるわけはありません。でも、ソフトボールに対する思いは誰にも負けない、その信念を貫いてきました。

ずいぶんムチャなこともやりましたが、私の真剣さに胸打たれた部分もあったのかもしれない。本気で叱り、一緒に頑張ってバカなことをやり、お風呂で延々と説教することもありました。意気に感じると徹底的についてきてくれるのも、また女性なのです。

そして選手を叱ったあとは自らの反省が始まります。三振やエラー、選手ができないのは指導者の責任。選手に理解させる力がないから失敗にもつながるので

※ 自然体でいけば 人は支えてくれる

指導者は選手から信頼される存在でいなければいけない。それには選手以上に勉強し、選手のいい部分をいかに引き出せるか、それが重要です。

今も、スポーツ界でも男女差があります。「女が……」という面はぬぐい捨てられていません。だから女性もつい頑張ってしまう。もつと自然体でやればいいのに……はたから見ているとそんなふうに思う女性指導者をよ

く見かけます。いいものを持つているのに、変に肩ヒジを張ってしまう。誰でも欠点があります。完璧な指導者なんていません。弱さを見せてもいい。そのほうが支持者も増えるはず。さまざまな経験をしたから、私はそれがよくわかる。

人間って寂しいものです。監督時代は、それこそすべて自分で決めなければならず、孤独でした。人生に対してずいぶんクールにもなりました。